

せんだん
梅檀とコーラス

本徳寺の境内には多様な植生が満ちあふれています。ブナの巨木が鐘楼堂を覆い、本堂の裏はまるで原始林のようです。経堂の周囲には雌雄の銀杏の巨木がそそり立ち、経堂の裏の池には紅葉が覆い茂っています。

境内の各所には幾種類のもの松が点在し、三本の由緒ある杉が天を目指します。よく見ると芭蕉や棕櫚の群生までも息づいています。二月に梅がつぼみを膨らませ、四月には蓮如堂の桜が一挙に開花し、五月には境内のツツジが人の目を樂しませます。

このような豊富な境内植種のなかで一際異彩を放っている一本の巨木があります。大広間の前に鎮座する梅檀の木です。五月も中旬になると、この梅檀は薄紫色の華飾りをまとい、その独特の香りが参道にまで漂います。

このような自然の恵みに包まれたお寺で、毎週金曜日、素晴らしいコーラスを聞くことができます。本徳寺コーラス部の皆さんが仏徳讃嘆の歌を心から楽しんでおられるのです。

今年、六月四日、コーラスの皆さんがレッスンのあとで、この梅檀の下に集り至福の一時をもちました。

み仏の願いが、木々のいのちの共演となつて、境内に満ちる梅檀の香りとなつて、そして讃歌の歌声となつてお寺に満ちあふれているようです。その時のようすが中段の写真です。



しゅうえ
衆会



高澤 香代子

衆会とは、沢山の人々が阿弥陀様の前に相集い礼拝する事。(仏法に出遇えた深い喜びを声にのせて…)「仏教音楽研究会メロディーの宝石箱より」
今年も上半期三回の発表を無事終え、本徳寺コーラス部も皆様より暖かい言葉、お気持ちを戴き七年目を迎えました。嬉しく感謝いたしております。

大広間での練習は寺院の外まで賛歌が流れ参拝の方が足を止めて聞いて下さる時など嬉しく励まされます。ただいま八月十四日孟蘭盆会に向け熱く取り組んでいます。以前に発表の曲もありますが、(それで終わり完成ではなく)一曲への想い、始めての曲との出逢いの感動、何度も歌い込み思索しながらの習練です。

さて、この度の新曲は、希代の仏教詩人 坂村真民さんの「二度とない人生だから」です。

終章には

二度とない人生だから
一輪の花にも
無限の愛を
そせいふやこつ
一羽の鳥の声にも
無心の耳を
かたむけてゆこつ

「わたし死んだら
あとをついでくれる
若い人たちのために
この大願を
書き続けてゆこつ」
と結ばれています。

皆様に早くお聞かせしたい気持ちです。
♪讃歌&熱唱♪
無限の愛をうたい上げます。
是非おいで下さい。お待ちしております。



上月敦子

輝け!! 本徳寺コーラス

金曜日の午前十時。本徳寺の大広間から、爽やかな歌声が響きます。先祖から何代にも渡って本徳寺を守ってこられたお家から、行事の時は、美しいお寿司を作ってくださる仏教婦人会から、私のように余所から、そして素敵な男性方。プロのような美声のソプラノ、優しく囁く声アルト、音取りの出来ない私、高澤先生の絶妙なタクト捌き、やさしい笑顔。「歌えるよ」と自信を持たせて下さる褒め上手。「バラバラでいっしょ。」ついに一つになるのです。どの曲も美しいハーモニーの心の歌に出来上がってしまうのです。

『そのままいいよ、すべてを救うぞ』の呼び声にお任せして、無心になって歌っています。でも私には、まだまだ呼び声が聞こえません。この和やかな空間で自由に動き回れるのは何故かしら。三年が過ぎてやっと分かりました。ここに集われる皆さんが『仏様』でした。自分の思いだけで行動してしまう私でも「そうか、そうか」と受け入れて下さいます。

亀山本徳寺は『大谷本願寺』第八代蓮如上人の開基に始まり、英賀道場に御本尊が下付され以降、『本徳寺』を号しました。時代に翻弄され存命の危機に直面しましたが、幸いにも現在の地で『亀山御坊さん』と親われています。善信（親鸞）が信心も、聖人（法然）の御信心も一つになり。如来よりたまわたりたる信心になり。“ただ一つなり”親鸞聖人の教えが今も脈々と生き続けています。

十一時、休憩時間です。十二単衣でお輿し入れなされた坊守様が「コーヒー」ですか? 「紅茶」ですか?とお茶を入れて下さいます。美味しさは格別!! 私たちは弥陀の願船に乗せて頂いて、坊守様が舵をとって下さって、暗きより『白の小道』まで連れて行って下さいます。しっかり一人一人の心を受け止めて、手を握って。この手は決して離しません。『この道』みなさんと一緒に歩き続けたいから。

「仏教讃歌に思うこと」

「青草は焼土に茂り、父母のすまはいはず……」これは『青草は』という歌の一節です。この詞を歌いながら思い出すのは、子供の頃、夏休みの日曜学校で祖父が話してくれた戦史にあつた広島の話です。昔地獄の絵本など家があり、それを見ていたせいか、それはとても生々しく、恐ろしい光景を想像させる話でした。そんな事がまた起きたらどうしよう胸騒ぎがしたものでした。語り継ぐとはこういう事かなと思います。実体験が無いのに話を聞いて心をうごかされる、喜んで、悲しんだり、共感したり。

歌の中にもそういう事があります。『みほとけにいだかれて』を歌う時「この歌を歌うと涙が出てくるのよ。」と母が言います。父のことだけではなく、色々な人の事を想うのだとおもいます。コーラスに集う時、団員の皆さんの経験や想いが、そしてまた願いが。一面の歌を通して響きあい、聞く人もとりこんで膨らんでゆきます。ウツウツとしていた気持ちも、皆と声を出しているうちに薄らいでゆきます。練習しながら励まされているようです。毎回四十人からの人たちが、ひとつひとつの歌に、声だけでなく気持ちを合わせていくのですから。

季節の移り変わりの美しい御坊の、それも大広間で、こんな時間を過ごす事が出来るのは幸せな事です。そして、何より恵まれているのは、熱心で歌が大好きで、夢いっぱい、天然な先生に導かれ、私たちの団員の、妹のような（娘かな……）、なんでもプロフェッショナルな伴奏の先生方に支えられていることです。そんな先生方に乗せられて、又、おしりを叩かれながら、私たちの思いも歌ってゆきたいと想います。



関 彰子



神頭 佐代子

感謝

物事の捉えかたで世の中の景色が随分違って見えてくる。

この人からは、良いお手本を教えて頂いた。感謝。あの人からは、悪いお手本を教えて頂いた。感謝。悪いお手本はなかなか無いので、沢山感謝できる。そう思うと、総ての事に感謝できる。

純粋な子供達から教えて貰える事柄に、汚れている大人にとつては、「ドキッ」とする貴重な事を教わる。晩年を迎えた私は後どれだけの事を様々な方から、何を気づかせて貰えるのか……と。

阿弥陀様が「始まったばかりですよ。まだ、まだ、これから……」と言われている様な気がする毎日です。

